

最も確かな史料と見做さねばならぬのであるが、今此の如く、所謂素金牌の一種と認められるものゝ上に、全くその記事と符合する漢字を刻した牌札が発見せられたのは、この書の史料としての確實性を保證することにもなり、快心の事といはねばならぬ。(編者云。この牌はいま京都大學文學部東洋史研究室の所藏に歸しているが、同時に出土した他の一面が天理大學の所藏になつてゐる。)

文中初めに「天賜」とあるのは、天の賜へるとか、天より賜へるとかの意で、成吉思皇帝に懸るものと思はれる。蒙韃備録祭祀の條に

其俗最敬天地、每事必稱天

と見えるのを始め、當時の蒙古人が敬天の念強く、事々物々これを天力に歸したことは著聞のことで、更ためて説くを要しない。それで成吉思皇帝の名の上にも、天から賜へるといふ語を用ゐたに外ならぬ。併しながらかゝる用例は、獨り蒙古人の間に限つたのではなく、北方民族の間には古來慣用せられたことで、蒙古では寧ろこれを襲用したのであると見るのが正當の見解であらう。一二の例を掲げてこれを證明するならば、史記の匈奴傳に、冒頓單于が漢の文帝に遣つた書を載せてあるのに據ると、その冒頭に

天所立匈奴大單于敬問皇帝無恙

と見え、また次の老上單于の時、中行説が單于に勧めて、漢に遣る書牘には、初めに

天地所生日月所置匈奴大單于敬問皇帝無恙

と書く體例を定めたと記されてある。また隋書突厥傳に載せたる沙鉢略可汗から隋の高祖文帝に致した書には、自